



ジロン・デイズ ■発行 名古屋環境局 〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目23-13伏見ライフプラザ13階 TEL.052-223-1067 FAX.052-223-4199
■発行年月 平成30年9月

◎環境に配慮し、古紙パルプを含む再生紙とベジタブルオイルインクを使用しています。

はじめに

飛び立て! 干潟の未来のために

平成30年3月、名古屋の中学生18人は、
環境保全の取組を学ぶため、
オーストラリアのジロング市を訪れました。



自ら環境保全に取り組む人材を育成 ～10年で104人の中学生を派遣～

名古屋市では、ジロング市における環境保全の取組を学ぶほか、現地の人々と共に学びあうことで、自ら環境保全活動に取り組むことができる人材を育成することを目的に、2年に1度中学生をジロング市へ派遣しています。この派遣は平成19年度に始め、平成29年度で10年目となりました。10年の間には29年度の派遣生も含め、104人もの中学生が海を渡り交流を深めています。

この報告書は中学生が派遣での学習成果を名古屋の方々に伝えるために、内容、原稿作成、写真選定など、多くを自らの手で行

いました報告書を通して、中学生の学んだことが名古屋の方々のさらなる環境活動につながることを願います。



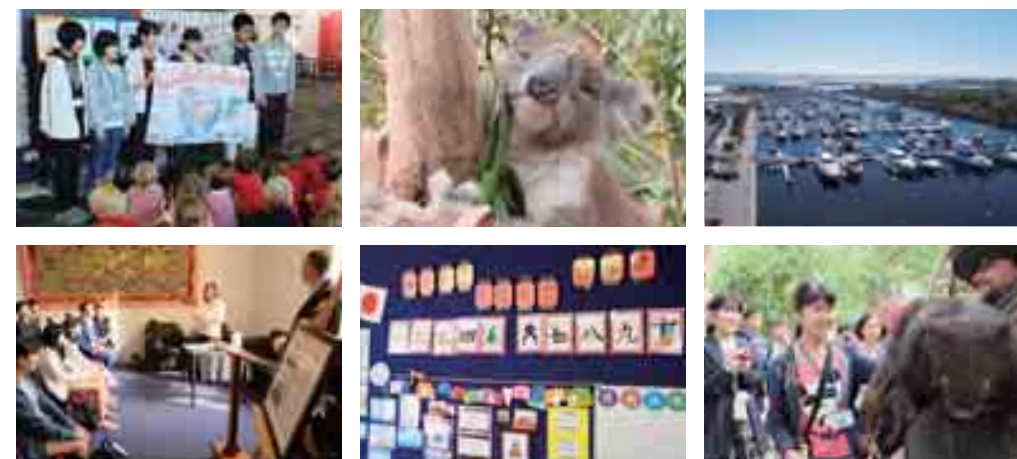
渡り鳥がつなげる名古屋とジロングの絆 ～湿地提携の締結で深まった結びつき～



名古屋市にある藤前干潟は、北半球と南半球を行き来する渡り鳥が数多く飛来する大切な中継地です。豊富なエサがあるこの場所で羽を休めた鳥たちは、オーストラリアやシベリアなどに向けて飛び立っていきます。

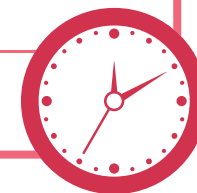
ジロング市は、オーストラリアの南東部に位置するビクトリア州に属する都市です。藤前干潟と渡り鳥のルートでつながる湿地があること

から、両市は平成19年5月22日に湿地提携を結び、協力して湿地の保全や活用に取り組んでいます。



旅のカレンダー

3/25日	中部国際空港発→シンガポール・チャンギ国際空港
3/26月	→メルボルン国際空港着→フィッツロイ公園→セント・パトリック大聖堂→フェデレーションスクエア →ビクトリア州立図書館→セレンディップ保護区
3/27火	→ジロング市役所→国立羊毛博物館 →ブリームリービーチ→ジラリಂಗ・コアラ野生動物保護区
3/28水	→海洋発見センター、スワンベイ干潟→クイーンズクリフ小学校→クイーンズクリフの浜辺 →クイーンズクリフ港
3/29木	→クイーンズ・ビクトリア・マーケット→メルボルン博物館 等 →メルボルン国際空港発
3/30金	→シンガポール・チャンギ国際空港→中部国際空港着



目にするもの、すべてが新鮮

このページでは、ジロングで目にした光景や
学んだことについて、中学生たちがレポートします。



ごみがほとんど落ちていないきれいな街 ～ジロングの街並み～



ジロング市は、オーストラリア・メルボルンから約70km離れたところにある、豊かな自然環境に恵まれたおよそ20万人が暮らす都市です。市内には100以上の湿地があり、毎年6万羽もの鳥が飛来し、遠くはシベリアからもやってきます。

ジロング市ではごみ箱がメインストリートに等間隔で設置されているため、落ちているごみ

をほとんど見かけませんでした。ちなみに、名古屋市でも街中にごみ箱を設置していましたが、平成16年に廃止しました。ごみは自分で持ち帰るようになり、今では分別に力を入れています。このように、ごみの処理方法一つとっても、ジロング市と名古屋市では取り組み方が異なっていることを知り、新鮮な気持ちになりました。



ズグロチドリを守るため市民が活躍 ～ジロングの浜辺で見かけた取組～

クイーンズクリフの浜辺やブリームリービーチといった浜辺にも行きましたが、ここでもごみは落ちていなかったです。また、海水は透き通っていて、とてもきれいでした。

私たちが学んできたことの一つに「ズグロチドリ」のことがあります。ビクトリア州で520羽、ジロング市でも20羽ほどしかいない絶滅の

恐れのあるとても貴重な鳥です。ビーチに卵を産みますが、人によって卵がつぶされてしまうのを防ぐため「DON'T TOUCH」と書かれた板を地元の小学生やボランティアらが設置し、ズグロチドリを守っていました。卵を見つけたら市役所に連絡し、保護する取組も行われています。

間近に見る野生動物の姿に感動 ～セレンディップ保護区&ジラリング・コアラ野生動物保護区～

柵がなく開放的なセレンディップ保護区では、カンガルーなどたくさんの生物を近くで見ることができました。ここでは絶滅の恐れのある野生生物の人工繁殖を行っているそうです。

ジラリング・コアラ野生動物保護区では、親

などとはぐれた生物を保護し、野生に戻すという取り組みを行っています。固有の生き物を守るため、とても大切な取組だと感じました。また、コアラなどのオーストラリアらしい動物と触れ合うこともできました。



生きものとの触れ合いを通じて学んだこと

海辺には生きものがいっぱい ～ブリームリービーチ&スワンベイ干潟～



ブリームリービーチという砂浜の海岸では、前頁で紹介した「ズグロチドリ」を観察しました。英語名は、何だと思いませんか？ その答えは「フーディッド・プラバー」。フードを被ったチドリという意味です。日本名の「ズグロ」とは、漢字で「頭黒」と書きます。同じ鳥なのに、考え方の違いで呼び方が変わって面白かったです。河口部は潮が少し引いており、小さなカニやカモメを見ることができました。

スワンベイ干潟では、ペリカンやブラックスワ

ン(黒鳥)を観察。ブラックスワンは、スワンベイの食物連鎖の大切な一部を構成していることを学びました。

スワンベイ干潟の周辺には農場があります。雨が降ると、この農場から雨水が海に流れ込みますが、その雨水に含まれる有機物が海環境に影響を及ぼし、生物の多様性が崩れる原因となってしまうそうです。このため、海に近いところに木を植えて、雨水が流れ込みにくくなるような工夫をしていました。



このページでは、ジロング周辺に生息している生きものについて、中学生たちがレポートします。



地元の小学生たちと一緒に見学 ～海洋発見センター～



海洋発見センターは海の生きものに触れたり、学んだりすることができる施設です。クイーンズクリフ小学校の児童とペアになって見学しました。

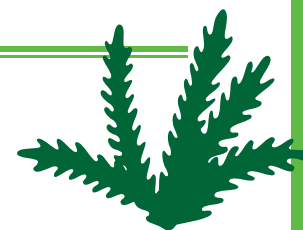
たくさんのカモメ、イカの卵、シーレタスというワカメのような海藻、スポンジのような海綿、ナマコの仲間のシーアップル…。クイーンズクリフの浜辺では、さまざまな生きものを見ることができました。イカの卵はプニプニした感触で、

目のようなものが透けて見えます。シーレタスは、食べてみると堅いワカメのよう。海水の塩がきいており、少ししょっぱかったです。また、海の色が濃いところは、海藻がたくさん生えていることを初めて知りました。

浜辺には、たくさんの海藻や木のようなものが打ち上げられていて、生きものたちの隠れ家や鳥たちの餌場になっています。そのため、荒らさないように注意して観察しました。



できることからすぐにでも始めることが大切 ～私たちがジロングで学んだこと～



生きものと触れ合うと同時に、たくさんの生きものが暮らす貴重な環境を大事にするため、いくつかルールがあることを学びました。

例えば、魚釣りの際に持ち帰ってもいい魚のサイズや数が、オーストラリアでは州ごとに決められています。海洋発見センターでは、そのことがわかるように定規と色々な魚が印刷されたシールがありました。また、固有の動物や植物を守るた

め、オーストラリアでは入国時に持ち込みできるものがとても厳しく決められています。乳製品や野菜、果物など、私たちの生活に身近なものにまで制限があり、気を付けなければなりません。

環境を守るためのルールが徹底されているオーストラリアに倣って、私たちも名古屋の貴重な自然や生きものを守るために、できることから始めていきたいと思っています。

環境問題への関心の高さに感心

このページでは、ジロングの人々との交流について、
中学生たちがレポートします。



幼い頃から自然に触れることの大切さを知る

～クイーンズクリフ小学校での交流会～



ジロングの人たちは、とてもフレンドリー。泊まったホテルにいた現地の人が発音の仕方を丁寧に教えてくれたり、クイーンズクリフ小学校の児童たちは、初対面で緊張している私たちに、積極的に話しかけてくれました。小学生たちと触れ合って特に驚いたのは、彼らが環境に対して高い関心を持っているということです。例えば、一緒に海辺を散策した時、ある児童が見たことのない生きものを見つけると、すぐに質問をしに先生のところへ。周りの生徒もその姿に興味深く覗き込んでいました。

どうしてこんなに環境に興味を持っているのでしょうか？それは、幼いころから自然を身近に感じてきたため、知識や関心が高くなったからではないかと思います。どんなにルールが厳しくても、人々の意識が不十分だと環境保護は長続きしません。ジロングでは小さな子も高い意識を持っていました。名古屋にも自然の楽しさを学ぶ場所があるので、今回の

ような体験を多くの人に話すことで自然の楽しさや奥深さなどを知ってもらい、名古屋の人々の環境に対する関心をもっともっと高めていきたいと思いました。



まとめ

私たちは、今回の派遣でたくさんのことを学びました。中でも強く実感したのは、世界中の国々で協力し今の自然環境を改善していかなければならないということです。これからは日常の中でも本当に小さなこと、例えばゴミが落ちていたら拾うことや、節水に心掛けることなど、環境について考えて生活していきたいです。みんながそのような生活をするすることで、少しずつ環境問題も解決されていき、人間と自然が尊重し合いながら生きていく世界になっていくと良いと思います。

この報告書を手にとっていただいたみなさんも、今まで以上に環境に興味を持って、身近なことから環境保全に取り組んでもらえると、とてもうれしいです。

藤前干潟や 名古屋の文化について紹介



名古屋に来たことのある市長と対面 ～ジロング市役所表敬訪問～

市役所では、ジロング市長はじめ多くのジロング市役所の方々に温かく迎えていただきました。

今回訪問した際のジロング市長は、偶然にも10年前に名古屋市と湿地提携を結んだ時と同じブルース・ハーウッド市長でした。ハーウッド市長は湿地提携調印式のため、名古屋に来ていただいたこともある方です。プレゼンター



ションを行った部屋には、調印式の写真や両市長のサインが入った湿地提携書が飾られていました。



みんなの声

- ジロング市役所の方々はラフな格好をし、みんなフレンドリーに接してくれました。
- 八丁味噌を紹介する際、「オーストラリアにある『ベジマイト※』のようなもの」と言ったら笑いがとれました。

- ジロング市役所はテレビで見るIT企業のような堅苦しくない雰囲気でした。
- 発表の際に市役所の方々が笑ってくれたので、緊張がほぐれました。
- 市役所での発表内容を振り返り、翌日の小学生への発表にむけて練習をしました。

※ベジマイト(オーストラリアで有名な調味料。さまざまな野菜をイースト菌で発酵させたもの。)

ジロングへ到着して2日目。
中学生たちはジロング市役所を表敬訪問しました。



a b c

手作りポスターを使って 多くの人前で説明

d e

ジロング市役所では名古屋や藤前干潟について自分たちでポスターを作りプレゼンテーションを行いました。

発表①

「藤前干潟の景色」

藤前干潟では季節や時間によって見られる景色が違うことを紹介。また、干潟周辺にある施設や工場の環境配慮への取組なども説明しました。



発表②

「藤前干潟の生物多様性」

プランクトンやカニなどの生きものを食べるための中継地として多くの渡り鳥が訪れることなど、藤前干潟における生物多様性について紹介しました。



発表③

「名古屋の食文化(味噌)」

「味噌」に焦点を当て、なごやメシについて説明。八丁味噌の作り方や、それをういた代表的なメニュー(味噌汁・味噌カツ・味噌おでん・味噌煮込みうどん)を紹介しました。



藤前干潟について学んだこと

中学生たちは名古屋の藤前干潟を訪れ、その特徴や歴史背景を知ること、藤前干潟がとても貴重な場所だと学びました。



藤前干潟について



藤前干潟は、庄内川・新川・日光川の三つの川が合流する名古屋港にある、面積323ヘクタールの広大な干潟です。ここには鳥類172種、カニやゴカイ、貝などの底生成物は174種いると言われています。藤前干潟はその特徴から、特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地であることを意味するラムサール条約湿地にも登録されています。

藤前干潟の目の前には名古屋市のごみ焼却工場である、「名古屋市南陽工場」が建っています。(p11写真内水色の建物)

私たちは実際に干潟に入ること、カニやゴカイ、ヤドカリ、アナジャコなどのたくさんの

種類の生きものを見ること、泥ならではの感触を肌で感じることができました。また、私たちが派遣されたオーストラリアから来たと思われる鳥やその他多くの鳥を見たことで、藤前干潟が「鳥たちのオアシス」であることもあらためて感じました。

そして、この生きものたちの環境には、「食べる・食べられる」の関係によって食物連鎖の循環があることも同時に感じました。

藤前干潟は守らなければならない貴重な場所ですが、さまざまな発見ができる楽しい場所です。ぜひ、多くのみなさんに藤前干潟へ来て、見て、触れて貴重な体験してほしいと思います。



藤前干潟の歴史背景

今から20年ほど前、名古屋のごみは年間100万トンも捨てられていました。その結果、岐阜の多治見にあるごみ埋立処分場の大半がごみに埋もれてしまい、このままではごみを埋める場所がなくなってしまう状況でした。ごみを埋めることが出来なければ町中にごみがあふれてしまいます。そのため、当時名古屋市はごみ問題を解決するため「藤前干潟」をごみ埋立処分場とする計画を進めていました。

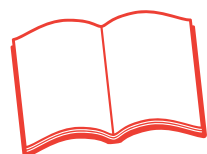
しかし、生きものにも人々にとっても大切な藤前干潟を守ろうとする多くの人々の行動により、平成11年1月に埋立処分場建設の計画は中止に。翌月にはごみ減量を目指す「ごみ非常事態宣言」が発表されました。

ごみ非常事態宣言では、2年間で20%、20万

トンのごみ減量を目標とし、それは資源の回収やごみの分別など、多くの人々の努力の末に、達成されました。そして、目標達成後も現在に至るまで、人々のごみ分別や減量の取組は行われています。



ジロングで過ごした 貴重な日々を振り返って



思い出深い学びと成長の6日間 ～中学生によるジロング市派遣個人レポート～

今回の旅に参加した18人の中学生たちにとって、ジロングで過ごした日々は、目にするもの、手に触れるものすべてが新鮮に感じられたことでしょう。

名古屋では決してすることのできない貴重な体験が連続する中で、彼らは多くのことを学んだようです。

彼らはいったい何を学び取り、何を感じ取ったのでしょうか？一人ひとりの学習成果を皆様へお伝えします。



成長と感謝

日比野中学校
浅野 恵



家族とではなく、同世代の仲間たちと行く人生二度目の海外旅行。行く前は緊張や不安もありましたが、今、振り返ってみると、私を大きく成長させてくれた6日間になりました。

たくさんのことを学びましたが、特に印象に残っているのは、オーストラリアの景色です。ごみが落ちていない街、青く広がる海と空、強い日差し、干潟や道端でそれぞれの命を育んでいる生きものたち…。目に映るものすべてに驚き、感動しました。「ごみが落ちていない」のも、「命を育むことができる環境がある」のも、きっと多くの人の努力の証し。オーストラリアの美しい自然とその陰にある人々の環境に対する意識の高さを目の当たりにして、「私たちも環境に対する意識を高く持ち、環境汚染の改善に向けて行動していかなければ」と強く感じました。

このような思いを持つことができたのは、オーストラリアに行き、広大で美しい自然に触れられたから。この派遣に携わってくださったすべての人に感謝すると同時に、参加できてよかったと心から思っています。

オーストラリアと自然

東海中学校
岡林 浩輝



なぜジロング市は、都市の発展を二の次にして環境保護を重視しているのだろうか…。僕はこの疑問を現地で調べてみたいと思い、今回の派遣事業に参加しました。

日本もオーストラリアも野鳥などの生きものについて、「大切に」「末永く」という観点で対応している点は共通していると感じましたが、相違点もありました。日本では「オリ」に入れ監視しながら保護するスタイルですが、セレンディップ保護区では、人間がほとんど関わらず、自然とほぼ同じ環境下で生きものたちの生活や成長を見守っています。こうした生きものと人間との関わり方が、両国の大きな違いであると感じました。

現地の小学生は、海岸などでよく生きものの観察をするそうです。その際、ごみ拾いも行うことで、自然の大切さを小さい頃から学ぶことができています。この思いこそが、オーストラリアの人々が最も大事にしていること。この派遣に参加したおかげで、目標に掲げたテーマについて少し理解が深まったように思います。

コミュニケーションで大切なのは言葉より気持ち

沢上中学校
加藤 安紀



旅の3日目、待ちに待ったジロング市役所への訪問は、予想を上回る緊張がありました。日本での事前学習で準備したことを発表すると同時に、環境保全に対する熱意など、私が日々、日本で感じている思いを伝えられるように心掛け、はつらつとした声で発表することができたのではないかと考えています。一度、言葉が止まってしまいましたが、「現地の小学校での発表時に活かすことができる」と考え、前向きな気持ちで終えることができました。

翌日のクイーンズクリフ小学校では、ジロング市役所での発表で出た反省点を解決し、納得のいく発表をすることができました。それは、ホテルでの自由時間に班で何度も練習した成果だと思います。その後の浜辺の散策では、現地の小学生たちと一緒に裸足になって散策しました。口を開く度に、言葉の違いを痛感しましたが、なんとか英語でコミュニケーションすることができました。伝えたいことを明確にし、意思を強く持って口を開けば、心は通じ合うということを実感。今回の派遣事業に参加して、とてもよかったと思いました。

ジロングでの新しい発見

有松中学校
金田 由菜



一番印象に残っているのは、海洋発見センターをクイーンズクリフ小学校の子たちと回ったことです。クイーンズクリフのことをあまり知らなかった私が「これは何?」と質問をすると、分かりやすく教えてくれました。みんな元気で明るい子ばかり。気に入った魚に「ジミー」と名前を付ける面白い男の子もいました。その様子を見た女の子が「あきた」と肩をすくめる姿が、かわいらしくて心が癒やされました。

海洋発見センターには、網や釣り糸など海で見つかったごみが展示されています。さらに、そのごみの被害にあった魚がケースに入れられているのを見た時は、人間が生きものに悪影響を与えていることに気付くことができました。

スワンベイ干潟は、とてもきれいでびっくり! 藤前干潟とは違い、水が透き通っていて、海岸にごみはほとんど落ちていません。名古屋とジロングは干潟があるので似ていると思っていましたが、環境も、生きものも、人々も、たくさんの違いがあることを発見することができました。

印象に残った5つのこと

名古屋国際中学校
木村 虎大朗



ジロングで過ごした6日間で、印象に残ったことが5つあります。1つ目は、セレンディップ保護区。柵がなく大きな鳥がすぐ近くを歩いていました。日本の動物園とは違って驚きました。2つ目はジロング市役所の表敬訪問です。職員はフレンドリーな方が多かったです。市長と一緒に写真を撮りました。

3つ目はクイーンズクリフ小学校の子たちと交流をしたことです。ジェームズ君、リムア君、ジャズミンちゃんが、気軽に話しかけてくれました。弟や妹と遊んでいるような気になり、とてもいい思い出になりました。4つ目は国立羊毛美術館に行ったこと。実際に布を作っている人が、身振り手振りを入れながら、上手に説明をしてくれました。

5つ目はメルボルンマーケット。ギターを演奏している人がいたり、さまざまな物を売っていたり、買い物を楽しむことができました。この5つ以外にも、たくさん印象に残ったことがあります。オーストラリアに行ったことのない学校の友人などに、説明できるようになりたいと思います。

私の意識の変化

猪子石中学校
工藤 和果



海洋発見センターやブルームリービーチなどの野鳥やさまざまな生きものについて学べる場所に行き、感じたことがあります。それは、世界がつながることで生きものと人間と一緒に生きることができるのだということ。なぜなら、1つの国で環境保全を行うより世界の国々が協力し合うことで、より多くの生きものを守ることができるからです。

それから、私が感じたことがもう1つ。ジロングの人々の環境に対する意識についてです。交流をした現地の小学生たちは、当たり前のように海岸でごみ拾いをし、野鳥などの生きもののことをとても大切に思っています。人々の命や環境問題に対する彼らの姿勢に心を動かされました。

私は今回の派遣で多くの刺激を受け、人との交流を通じて何かを学ぶことができることや、日常の小さなことから環境問題が改善されていくと思うようになりました。私は今回の派遣を一生の大切な経験とし、自ら活発に環境保全活動をしていこうと思っています。いつの日か、人間と生きものが互いを尊重し合いながら生きて行ける世界が来る日を願って…。

オーストラリアの自然や環境への取組

香流中学校
桑田 秀美



今回の派遣でオーストラリアの人々について驚いたことが2つあります。1つ目は絶滅危惧種のズグロチドリを守ろうと一生懸命な人たちの姿です。海の入り口に立っていた看板には、ズグロチドリへの接し方について書いてありましたが、興味深かったのはリードをつければ犬も入ってもいいということです。保護エリアに違う動物は入れないほうがいいのかと思いましたが、ここでは人々の生活と動物保護の両立を図っているのだと思いました。巣を他の鳥の攻撃から守る屋根も見学しましたが、ズグロチドリを守りたいという思いが伝わってきて感心しました。

もう1つは市民の環境に対する意識についてです。日本にきた外国人観光客は口を揃えて「日本にはまったくごみが落ちていない」と言ってくれますし、世界中で日本が一番きれいだと思っていましたが、オーストラリアはその日本よりもさらにきれいでした。オーストラリア人の環境に対する意識の高さは「本当に素晴らしい!!」と思いました。私は、この貴重な経験を日本に広める活動をしていくつもりです。

街や干潟にごみが落ちていないことに感動

津賀田中学校
小林 美空



今回の派遣を通して思ったことが4つあります。1つ目は、動物たちが大自然の中でのんびりとしていること。名古屋の東山動物園では狭い1つのエリアにたくさんの動物がいるのに対し、広大な土地を持つセレンディップ保護区では、カンガルーやエミューなどの動物が思い思いに過ごしていました。2つ目は街や干潟がきれいだったということ。名古屋の藤前干潟では年に数回、ごみ拾いが行われていますが、それでもごみが目立ちます。一方、ジロングでは街中にもスワンベイ干潟にもごみはほとんど落ちていません。特にスワンベイでは名古屋のようにごみ拾いは行われていないというから驚きです。市民の環境への意識の高さや努力があってこそのことだと思います。

3つ目は生きものを大切にする志の高さ。現地の小学生たちが、海洋発見センターにいる海の生きものに敬意を持ち、大切にしている姿に胸を打たれました。最後は、人と人とのつながりの大切さです。現地の人々と「動物を大切に」という話で盛り上がりました。遠く離れていても、渡り鳥のように互いを結び、環境保全に取り組めるといいなと思います。

派遣を通して学んだこと

南山中学校
澤井 優希



オーストラリアの海岸にはまったくと言っていいほどごみが落ちていないのに、日本の海岸にはビニール袋などのごみが落ちています。この違いは、人々の海への関心の違いではないでしょうか。オーストラリアでは、小学生でも生きものや名前や特徴を知っています。学校の先生や家族から海や干潟の大切さを教わっているからだと思います。一方、私は小学生の時に藤前干潟について少し習っただけ。校外学習で名古屋港へ行った時も、干潟について学ぶ機会はありませんでした。この違いが、海岸の様子の違いにつながっているのだと思います。私は藤前干潟の大切さを多くの人に知ってもらいために、干潟を守るための取組に積極的に参加していきたいと思うようになりました。

現地の小学生との交流では、中学校で習った英語の文章が通じ、返事をもらえた時はとてもうれしかったです。小学生たちは英語が得意ではない私に一生懸命伝えようとしてくれて、心が温かくなったことは今でも覚えています。文章になっていなくても、単語やジェスチャーで思いは伝わります。とにかくやってみることが大切なことを学びました。

目標への一步

天白中学校
澤田 柚香



事前学習に参加する中で、私は「干潟を通してたくさんの人と出会い、交流したい」という目標を立てました。その目標に「近づけた」と思ったのが、クイーンズクリフ小学校の子たちとの交流です。英語が得意ではないので、その子たちが話す意味を理解することができませんでしたが、私に教えてくれようとする熱い気持ちは伝わってきました。目標に近づけたと感じたのは、これだけではありません。17人のかけがえない仲間と出会えたことも目標への一步です。違う学校に通っているので全員が初対面でしたが、「環境を守りたい」という同じ想いを持つ仲間として、親しくなれました。でもまだ目標は達成できていません。なぜなら、やらなければならないことが残っているからです。それは干潟を守るための活動。藤前での取組に個人的に参加したいと考えています。もしこの文を読んで、干潟について少しでも興味や関心を抱いてくれた人がいたなら、そんなにうれしいことはありません。私の目標が一步前進したことを意味するからです。

オーストラリアで学んだこと

平針中学校
田中 温



私がオーストラリアで強く感じたことが2つあります。1つ目は、渡り鳥を守るためには、いろいろな国が協力することがとても重要だということです。渡り鳥は1つの国にずっと留まることはありません。だから渡り鳥が飛来するすべての国は、渡り鳥の住みやすい環境をつくらなければならないのです。もし、渡り鳥が飛来しなくなったら、その場所の生物多様性は崩れてしまいます。だから、国同士が提携を結ぶことは、環境を守る第一歩なのです。2つ目は「知る」ことに大切さです。実際に干潟や生きもののことを学ぶのは、環境保全に対する意識を高めることにつながるのではないのでしょうか。私より年下のクイーンズクリフ小学校の子たちが、ジロングの生きものについて一生懸命説明してくれる姿を見て、自分が知っていることはほんの一部に過ぎないことを痛感しました。オーストラリアでは学校では学べないことをたくさん学ぶことができました。ここで学んだことを、たくさんの人々に広め、名古屋の環境に対する意識を今以上に高めていきたいと思っています。

自然を楽しんで!

高杉中学校
田平 理湖



今回の派遣に参加した理由は、もっと多くの人に環境問題について関心を持ってもらいたかったから。私は藤前干潟を守る「ガタレンジャーJr.」として活動していますが、ジロングの干潟と対比することで、大好きな藤前干潟の魅力をさらに知ってもらえると思ったのです。スワンベイ干潟の周辺には大きな建物がなく、工場などの建物に囲まれた藤前干潟とはまったく違うものでした。ごみがひとつも落ちていなかったことも印象的。多くのごみが落ちている藤前をごみがまったく落ちていないきれいな干潟にしたいと思いました。ジロングで過ごした日々を通じて、人々の環境への関心が美しい自然につながっていると実感しました。では、どうすれば環境に興味を持てるのでしょうか?それは自然の楽しさを知ることから始まると私は考えます。なぜなら、私が環境に興味を持ったきっかけが、幼い頃「干潟の泥の感触が気持ちよくて楽しい」と思ったことだったからです。現地の子たちも五感を使って自然を楽しんでいるようでした。自然を楽しむ心を、多くの人に持ってもらいたいと思います。

物事の視野を広げられた体験

猪高中学校
堀 蒼輝



初めての海外で思ったのは、「世界は広いんだ」ということ。世界に比べれば日本は非常に狭く、「自分の考えていることなど、世界を相手にすればたいしたことない」と思いました。美しい景色を見たり、日本ではできない体験をしたり、オーストラリアでの日々はとても充実。中でも印象に残っているのは、現地の小学生との交流です。初めて会った時は少し緊張しましたが、仲良く一緒に楽しい時間を過ごせました。英語の実力はまだまだだと思い知らされましたが…。ジロング市役所などで行ったプレゼンテーションは、完璧とまではいかないものの、自分なりに名古屋の魅力を伝えられたと思います。聴いている人たちが温かい目で見守ってくださったので、落ち着いて話すことができました。この旅の目標としていた物事の視野を広げることができたと思います。それは、さまざまな人々と交流し、世界にはたくさんの方がいることを知ったからです。視野が広がったからには、今後、自分の意見を言う時は、客観的にみてどうなのかを考えてから主張するようにしたいと思います。

多くの人に知ってもらいたいこと

名古屋大学教育学部附属中学校
松永 桃子



今回の派遣で私は多くの人と出会いましたが、どの出会いも私にとって貴重なものとなりました。まず思い出すのが、一緒に行動したクイーンズクリフ小学校の2人の生徒です。私は英語を流暢に話せませんでしたが、ジェスチャーなどを用いて、楽しく交流することができました。2人とも私より年下なのに、生きものの名前をたくさん知っていて、関心が高いことに驚きました。同じ班になった5人との出会いも貴重です。私の知らないことを知っていたり、キラリと光る個性を持っていたり、みんな個性的。一緒にいて面白かったです。おかげで充実した1週間を過ごすことができました。ブリームリービーチでは、希少なズグロチドリを見ることができました。地元の人々は卵や雛を天敵から守るために、巣の上に屋根をかぶせています。その努力のが実り、ズグロチドリの数は少しずつ増えているそうです。現地の人々が干潟や鳥たちを守る姿を見て、藤前干潟についてもっと多くの人に大切さを訴えていく必要があると感じました。たくさんの方が協力して干潟を守れば、さまざまな生きものたちが住みやすい社会になると思います。

オーストラリアのカラス

愛知教育大学附属名古屋中学校
水口 野乃花



コアラやカンガルーなどたくさんの動物を見た中でひと際印象に残っているものがあります。それはカラスです。ジロングでは20羽しかいないというズグロチドリも見ましたが、それよりも白黒のカラスのほうが印象深いのです。それはジラリング・コアラ野生生物保護区を歩いている時でした。首の後ろと翼の先が白いカラスがいたのです。木々の間にいるカラスはとても神秘的に見えました。憧れていた海外の空気が、余計に美しくさせたのかもしれない。そのカラスはいきいきと輝いているように、私の目には映りました。実はカラスを街中で見かけるのは日本ぐらい。本来は森にいてバードウォッチングで見る鳥なのです。この神秘的なカラスこそ、目指すべき自然の姿だと思います。もちろん、環境破壊を止めるため、自然を保護し動植物の絶滅を食い止める必要があります。しかし、そこはまだゴールではないのです。私たちが目指すべきは、人と自然が適度な距離を保ち、すべての生きものがこの神秘的なカラスのように自然の中で輝ける世界なのだと思います。

環境についてまだまだ勉強が足りないことを実感

萩山中学校
湊 有希



この6日間で特に印象に残ったことは、クイーンズクリフ小学校の子たちが動物や自然についてとてもたくさんのことを知っていたことです。私よりもいろいろなことを知っていて、海洋発見センターでは、次々に生きもののことを教えてくれました。どの生きものも初めて見るものばかりでしたが、彼らのおかげで詳しくなりました。

また、一緒に浜辺を散歩していた時、よく分からないものがあると小学生たちはすぐに先生に質問をしに行っていました。そんな姿を見て、分からないことや知りたいことを見つけたら、うやむやにせず自ら動いてみることの大切さを学んだ気がします。それから、小学生たちが食物連鎖のことをよく知っていたことにも驚きました。私よりも年下なのに、環境についてしっかり学んでいることを知り「私もまだまだ勉強不足だな」と実感させられました。

メルボルンの街にはごみが落ちてなくて、とてもきれい。芝生があつたり木が植わつたりして、都市と自然が共存しているとも感じました。大人はもちろん、子どもたちも環境について関心を持っているからこそ、街並もきれいなのだと思います。

日本とオーストラリアの違い

志賀中学校
南 涼太郎



ジロング市で印象に残ったのはジラリंगा・コアラ野生動物保護区とクイーンズクリフ小学校です。

ジラリंगाにはカンガルーやコアラなどがたくさんいます。東山動物園との違いは、柵で囲われていないこと。開放感があり、動物たちもストレスなく生活ができているようです。おかげで間近に寄って観察ができるのが、とても楽しかったです。日本ではできませんが、ジラリंगाではこれらの動物に触ることも可能です。

クイーンズクリフ小学校も開放的な雰囲気でした。小学校0年生から6年生までが在籍し、全校生徒がみんな仲良くしていました。この小学校ではなんと、日本語の勉強もしていました。それから日本のようにイヤリングなどが禁止されておらず、オーストラリアの子たちがみんなイヤリングやネイルをしていました。

派遣先のオーストラリアでは、日本とオーストラリアの違いをしっかりと見たいと考えていましたが、その目標のとおり、しっかりその違いが分かるようになりました。

日本の良いところを再発見

御田中学校
門内 隆将



オーストラリアで過ごした6日間で強く印象に残ったことは、日本とオーストラリアの文化や様子の違いです。

オーストラリアに着いてまず感じたことは、街の様子が日本とはまったく違うこと。日本と同じようにビルがたくさん建っていましたが、金や紫などデザインを意識した建物が多かった。住宅街には緑が多く、ところどころに花や木が植えられていました。

日本では見たことのないような鳥が町中を飛んでいるところを発見しました。日本ではカラス、スズメ、ハトなどしか見かけないため、オーストラリアの自然の豊かさを実感しました。

今回の派遣で、環境を守ることの大切さやオーストラリアのよいところを学ぶことができました。それとは逆に、スリに気をつけなければならなかったり、夜に外出することは危険だったり、不便なことを知り、日本の良さを再発見することもできました。今回の貴重な経験を自分の今後に活かしてだけでなく、多くの人に発信していきたいです。



NPO等

NPO法人藤前干潟を守る会 亀井浩次
名古屋市野鳥観察館 野村朋子
(指定管理者 東海稲永ネットワーク)

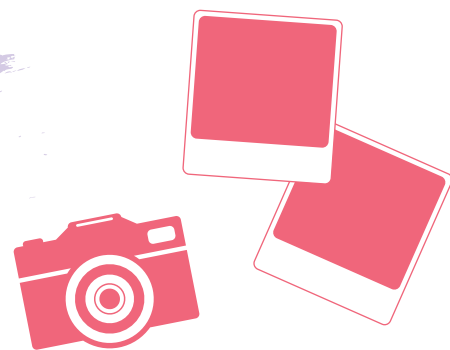
名古屋市

環境局環境企画部主幹 西尾英孝
環境局環境企画部環境活動推進課主査 戸田成一

この旅で出会った多くの生きものたち



旅の思い出 なんでもベスト3



Q1 ジロング派遣で 印象に残った場所は？(自然)

- 第1位 セレンディップ保護区
- 第2位 クイーンズクリフの浜辺
- 第3位 ジラリング・コアラ野生動物保護区

日本では見たことのない、さまざまな生きものたちと触れ合える場所が上位にランクインしました。



小林 美空

とてもきれいなクイーンズクリフの浜辺を地元の小学生たちと歩いて楽しかったです。

Q2 ジロング派遣で 印象に残った場所は？(観光地・その他)

- 第1位 クイーンズ・ビクトリア・マーケット
- 第2位 セント・パトリック大聖堂
- 第3位 クイーンズクリフ小学校

1位は初日に、2位は最終日に訪れた場所。やはり最初と最後の印象は強いようです。



湊 有希

セント・パトリック大聖堂のステンドグラスはきれいだったなあ♡

Q3 ジロング派遣で 印象に残った生きものは？

- 第1位 ズグロチドリ
- 第2位 コアラ
- 第3位 ウォンバット

浜辺で観察したズグロチドリの印象が強く残ったようです。コアラの人気の高いものがありました。



門内 隆将

ジロングで20羽ほどしかいないとても貴重な鳥を見ることが出来ました。

Q4 ジロング派遣で 印象に残った食事は？

- 第1位 大きなステーキ
- 第2位 中華料理
- 第3位 ホテルの朝食バイキング

さすがは食べ盛り。男子の間で、お肉の人气が高かったようです。中には日本食が恋しくなった人も…。



堀 蒼輝

2日目の夜に食べたお肉はやわらかくて絶品でした。

Q5 ジロング派遣の お土産といえば？(食べ物)

- 第1位 チョコレート類
- 第2位 クッキー・ビスケット類
- 第3位 紅茶

オーストラリアにしかない菓子類の人气が高かったようです。虫入りのアメを買ったというチャレンジャーもいました。



浅野 恵

クッキーを家族や友人に買いましたが、『おいしい』と好評でした。

Q6 ジロング派遣の お土産といえば？(食べ物以外)

- 第1位 ぬいぐるみ・人形
- 第2位 ボディクリーム類
- 第3位 キーホルダー・ストラップ

コアラやカンガルーのぬいぐるみ・人形がダントツの1位。2位のボディクリームは女子に人気でした。



岡林 浩輝

お腹に子どもを連れたカンガルーのぬいぐるみがかわいくて買いました。部屋に飾っています。

Q7 ジロング派遣での ハプニング!?

- 第1位 寝坊
- 第2位 忘れ物・失くし物
- 第3位 言葉の聞き間違い

4日目の朝、出発時間になっても一部の女子が集合場所にこないという大事件が当然(?)の1位です。



匿名希望

本当にすみませんでした。反省しています。もう二度と夜更かしはしません。

Q8 藤前干潟を体験した 感想をひと言!

- 第1位 生きものがたくさんいる
- 第2位 水深が深かった
- 第3位 泥がたくさん・気持ちいい

ほとんどが干潟に入るのは初めてという中学生たち。さまざまなことを学んだようです。



金田 由菜

私が思っていたよりも、たくさんの生きものがいてびっくりしました。



このページは中学生たちが企画を考えました。
旅の思い出をランキング形式で振り返ります。